

---

## 訳者解題——亡命の人に向けて

芳賀 達彦

---

### 1

本稿は *Capital & Class*. 40 (2016) に掲載されたデニス・オハーン (Dennis O'Hearn) とアンドレ・グルバチッチ (Andrej Grubačić) の共同執筆による 'Capitalism, Mutual Aid, and Material Life: Understanding Exilic Spaces.' の全訳である。

アンドレ・グルバチッチ (Andrej Grubačić) はバルカン半島出身の歴史家で、同時にラディカルな活動家である。主要な著作には *Don't Mourn, Balkanize!: Essays After Yugoslavia* (PM 出版, 2010) や、アメリカの著名な歴史家ストートン・リンド (Staughton Lynd) と共著した *Wobblies and Zapatistas: Marxism, Conversations on Anarchism, and Radical History* (PM 出版, 2008) などがある。またパンクカルチャー・マルクス主義・アナキズム・革命論など多種多様の書籍を刊行するインディペンデント系の出版社, PM 出版の編集業にも携わっている。グルバチッチによれば、デヴィッド・グレーバーの手による最後の文章は PM 出版から復刊が予定されていたクロポトキンの『相互扶助論』(2021年9月出版)の序文として寄稿されたエッセイということである。この「序文」については解題の後のほうでふれたい。

デニス・オハーン (Denis O'Hearn) は反監獄闘争を対象とするアイルランド出身の研究者であり、かれもまた活動家である。グルバチッチとは 2012 年に開催されたクロポトキン生誕 170 周年の記念祭典で意気投合し、以後は共同で研究活動に取り組んでいるという。オハーンの執筆したポビー・サンズ<sup>(1)</sup>の評伝 *Bobby Sands: Nothing But an Unfinished Song* (Pluto Press, 2016) はオハイオ州やカリフォルニア州における独房への監禁に対する囚人の抵抗運動に大きな影響を与えたようだ。

今回訳出した論文は両名が 2016 年に共同執筆した *Living at the Edges of Capitalism: Studies in Exile and Mutual Aid*. [資本主義の辺境を生きる：亡命と相互扶助の研究] の序論と結論部分から方法論にふれる部分を要約・再構成した内容となっている。同書は「国家なき空間 (亡命的空間) の比較研究」を目指した意欲的な作品であり、サパティスタ共同体やコサック共同体、あるいは囚人の抵抗運動における自助グループの場実際に足を運んで綴られた貴重なエスノグラフィーでもある。同書の刊行時にはグレーバーの推薦文が寄せられ「解放のための書物として非常に面白く、とても使い勝手のよい本」という旨の賛辞が贈られている。

『負債論』以後、意表をついた現代批評で読み手を驚かせるグレーバーだったが、おそらくわたしたちを最初に驚愕させたその主張とは「国家なき社会は可能だ」(『アナーキスト人類学のための断章』)という鮮烈なメッセージにほかならないだろう。ゆえに、現代における「国家なき空間の

---

(1) Robert Gerard Sands (1954-1981)。IRA 活動を理由に投獄され、サッチャー政権下でのハンガーストライキにより死亡したアイルランドの伝説的な囚人である。2008 年には一連の事件がスティーブ・マックイーン監督で映画化されている。

比較研究」というグルバッチらの仕事はグレーバーの著作に惹かれた読者にとって、またこれから読み手となる人間にとって、その知的関心（また実践的関心）に沿うようにおもわれる。

## 2

本稿の特徴は「国家なき空間」を「exile」（亡命）もしくは「exilic」（亡命的）という一語によって再規定する点にある<sup>(2)</sup>。原注にある通り、この表現じたいは現代のジャマイカの都市文化の研究を敷衍したものだが、二人の著者はその含意を可能なかぎり押し広げつつ、経済・政治・社会的次元を横断的に記述する分析概念として使用している。その意味するものは難解な事柄ではなく、特定の支配の諸形態（ここでは資本主義と国家）からの脱却とオルタナティブな実践や制度の創造である。

グルバッチらがこのような術語を肯定的な概念として用いる背景には、近年の民衆闘争理解における重要な転回が了解されている。歴史的に見た場合、権力に対して成功裏に勝利した民衆闘争の主要戦略とはある種の「エクソダス（集団離脱）」だったという認識である。「国家なき社会」の研究に先鞭をつけたピエール・クラストル（フランスの人類学者であり、また生粋のアナーキストだった）の作業の継承にあたり、グレーバーやスコットが指摘するのは、クラストルの足を踏み入れた「未開社会」は国家を知らぬ社会ではなく、その脅威を肌身に味わい、そこから逃れた人間たちの創設した社会だったという事実である。そこからさらにグレーバーは、国家なき社会がエクソダス（集団離脱）によって成立していた事実は「現代社会」に暮らす人間たち（わたしたち）にも無関係でないことを強調する。もとより、「革命的エクソダス」戦略の理論転回に大きく寄与したのがイタリアのマルクス主義者（オートノミスト）だったように、現代の実験的な抵抗運動（仕事の拒否戦略、占拠、スクウォッティング）にはこのエクソダスの要素が少なからず含まれるのである<sup>(3)</sup>。

グルバッチとオハーンはこれらの指摘を踏襲しつつ、国家なき空間を「亡命」という「行為」の一形態として規定し、人類学や歴史学の対象とみなされる人びとの実践をわたしたちのそれと水平的に比較する作業を目指しているものと考えられる。本文でも明らかなように、グルバッチらが強調するのは、亡命的行為は特定の領域からの脱出（逃亡）に限定されず、構造化された特定の実践や制度からの脱却としても理解しようという点であり、この主張こそがグレーバーやホロウェイに倣った著者たちの基本的な主張なのである<sup>(4)</sup>。「国家なき空間」の衰退についていささか悲観的

(2) 訳語の選定にあたり、「政治的迫害による追放」という否定的かつ受動的な意味合いがまず想起される語をあてるかは悩みどころだったが、著者たちの意図に概念転覆的な志向性のある点を踏まえ、本稿では素直に「亡命」を採用した。また「亡命」という漢語の由来は「命」は名籍を指し「亡」はそれらを失くすこと／隠すことであり、国家からの空間的／構造的離脱という本文の主旨に沿うものと考えられる。

(3) 裏を返せば、支配関係を維持する最大の争点は支配対象の逃亡可能性を封殺することにある。この点に関してはGraeber（2015）を参照せよ。

(4) 共同体や主体間の関係性はそれらを「生産する」人びとの活動（行為）の上に成立するというのが本文の主張だが、グレーバーの革命論・価値論の骨子も、人間の「行為」に基盤を置いた非常にラディカルな構築主義を採用する点にある。特定の構造・制度・個人の属性といった、さもなければ所与の実体とみなされる人間的事象（民族、親族構造、階級、価値、等々）は人びとの諸行為の連鎖によって成立しよう一時的過程として認識される。この点に関しては、Graeber（2001：60-63）を参照。

なトーンを感じられたジェームズ・スコットへの批判的エールとして引用されたラテンアメリカの事例は、比較研究による視野の広さがもたらしてくれる興味深い事実である（当のスコット自身もラウル・ジベキの熱心な読者であることを公言している）。

著者たちのもう一つのねらいはマルクス主義とアナキズムの架橋である。一読して明らかなように、本稿のマルクス主義は主として世界＝システム論に依拠したものである。資本主義が「国家なき空間」（亡命空間）へと根を伸ばし、それらを「捕獲」してゆく事態に対して最大限の警戒を払わねばならないというのが著者たちの主張である。これはフェミニストによる理論的進展に触発されたものであり、また近年の国家なき空間の分析（スコット）に対する批判的応答でもある。自律的な経済領域、オルタナティブな経済原理（相互扶助）に寄生し、それを食いつぶしながら拡張してゆく資本主義システムの特質からすれば、この点は見落とせない問題であり、同時に、わたしたちが今まさにアクチュアルに理解しうる事態であるようにもおもわれる。

### 3

今回、デヴィッド・グレーバーの特集が組まれるに際して、訳者が本論の訳出を提案したのは、本稿のねらいがグレーバーの魅力（カール・マルクスとマルセル・モースの和解）と重なった点が大きな理由であるが、過去にグレーバーが『資本主義後の世界のために』の対談で口にした一つの構想が訳者の頭の片隅に残っていたためでもある。「アナキスト的世界システム論」<sup>(5)</sup>という、非常に魅力的な響きの構想の行方が気になったのである。アンドレ・グルバッチは、このプロジェクトに携わる共同研究者の名前だった。

グルバッチはバルカン半島出身の歴史家で、ユーゴスラビア崩壊後のベオグラードでの活動後、アメリカに渡り、ブローデル研究センター<sup>(6)</sup>の一員としてウォーラステインに師事した経緯を持っている。かたやグレーバーはイェール大学の頃にウォーラステインと友人となり、ウォーラステインの「世界革命論」の発想に強く共感したという<sup>(7)</sup>。

世界＝システム論をアナキストの視点と人類学の知的道具立てによって換骨奪胎するという構想の骨子は、まずもって、ブローデルに始まる偉大な知的伝統に立ち返ることから始まるという。つまり、過去に存在したいかなる人間社会も孤立した自己完結的領域ではなく、また人間社会にとって真に重要な契機は複数の文明が接触する場から生じてきたとする認識である。

---

(5) ただし「アナキスト的世界システム論」というこの呼称はグレーバーの命名でない可能性が高いようおもわれる。グレーバーは頻繁に「アナキスト」を学術的な方法論のように冠するのはナンセンスだと説いていたためである（「わたしはアナキストで、人類学者です。ただ、わたしをアナキスト人類学者とは呼ばないでください」）。これは理論的・分析的方法論として一種の学術的地位を確保したマルクス主義とは異なり、アナキズムは社会運動や社会変革の実践にひろく内在する倫理的傾向を指すという認識のためである。「アナキスト人類学」という名称は、言ってみれば「社会民主主義社会学」のような奇妙な肩書にはかならず、「将来は存在するかもしれないが、今は存在しない」学問だというわけである。

(6) イマニユエル・ウォーラステインが1976年に開設した研究機関（ニューヨーク、ピンガムトン大学所属）、2020年6月、惜しまれながらも閉鎖となった。

(7) Graeber, Kacem, and Turuquier-Zauberman (2020) を参照。

一般的な世界システム論は、中心と周縁の経済的な依存関係を問題にします（……）われわれは商品の往復的な流れを見て、そこに不平等な通商条件があることを理解できるようになる（……）過去に存在した社会についても、孤立した領域として研究することはできません。われわれはむしろ異なった社会に生きる人びとの相互依存関係、お互いに大変離れた場所に住む人びとの相互依存関係を見なければならぬのです<sup>(8)</sup>。

一般的な世界システムの場合であれば、文明間の人間の移動として想定される第一のものは国際的通商関係を通じた「交易」(trade) だろう。だが、ここに違った補助線を引いてみるのはどうかというのが、グレーバーそしてグルバッチらの着想の原点である。すなわち、特定の政治的圏域・支配関係からの離脱としての「亡命」(exile) こそが、無数の可能性のもとに暮らす地球上の人間たちを引き合わせ、オルタナティブな政治や経済、闘争の歴史を啓いてきたのではないかという基本認識である。ジェームズ・スコットが『ゾミア』のなかで描いた、あのきわめて魅力的な東アジアの亡命の地図を世界史のスケールで着手したらどうなるかという壮大な構想がここにある。

実際、グルバッチが目撃したバルカン半島の闘争の歴史は、このような着想の可能性を痛感させるものだったに違いない。バルカン半島は、戦闘的労働組織、亡命者、異端の思想家、反ファシスト運動家、海賊までが多種多様な地域から流れ着き、入り乱れ、めぐり合った空間であり、きわめてラディカルな思想と抵抗の実践が生じたのだという。

#### 4

冒頭に述べたように、グレーバーの最後のエッセイは、クロポトキンの『相互扶助論』の復刻に際しての「序文」だった。このさほど長くないエッセイのなかで、グレーバーは先の構想とも通底する、世界を横断した思想史上の重要な出会いを挙げている。それは「相互扶助と所有的個人主義の制度の相克」や、「人間社会の発展段階に応じて、人間同士の溝を深める傾向の社会組織や規制がその都度発生してくるが、いずれの発展段階においても社会を下から組織する共通の方法として相互扶助が再登場してくる」というクロポトキンの記述の背景を具体的な事実の厚みから説明しているようにおもわれる。そこで、少々長い引用したい。

グレーバーによれば、フランス啓蒙思想の展開には17世紀末頃の先住民との交流を通じた西欧社会批判の存在が決定的だったというのである。

1680年代、コンディアロンクという名前のヒューロン＝ウエンダット系社会（北米先住民社会）の有力者がいた。ヨーロッパを訪れた経験があり、入植者の社会にも通じる人物だったコンディアロンクは、フランスの派遣した植民地執政官であるラホントン男爵と一連の議論を交わした。コンディアロンクはかく語った。懲罰的な法や国家機構が存在しているのは、人間本性に根本的欠陥があるせいではない。むしろ、私的所有や貨幣といった国家とは別の一連の仕組み（制度）が人びとを煽り、その手の〔利己的〕ふるまいを助長するからである。だから各人を無理やり従わせる手段が必要になっ

(8) グレーバー著・高祖訳（2009: 136）。

てくる。ならば自由を叶える条件は平等である（……）この話がラホントンによって一冊の書物になると、1810年代には大変広く読まれるようになり、以来20年にわたってパリの劇場で上演された。当時の啓蒙思想家はこぞって似たような話を書いた。この議論があまりに力を持ってしまったため（また先住民のフランス社会批判が広まるにつれて）、ついにアダム・スミスやテュルゴーといった既存社会の擁護者たちが、直接的反撃として社会進化論の概念を発明するに至った。人間社会はそれぞれの段階に特質的な技術と組織形態を備えた発展段階に応じて組織されうるという主張である。これを語った者たちの頭に浮かんでいたものとは、まさにこれ〔先住民からの批判の存在〕だったのである。テュルゴーは書いている。「だれだって平等と自由を愛している。ただし問題は、それらが複雑な分業の上に成立する進んだ商業社会といかほど折り合いがつかないということなのだ」。この結果、社会進化論は19世紀を席卷し、現代でもわずかばかり形をかえながら、わたしたちのすぐそばに残存しているのである<sup>(9)</sup>。

この序文はインターネット上で公開されていたものだったが、おなじページ内には、グルバッチがグレーバーに手向けた追悼文がアップされており、またページの一番下にはグレーバー本人の書いた手短な著者略歴が付されていた。

今回、訳者が「exile」という本文の概念に対して、意味内容から類推される「脱出」や「逃避」といった訳語をあてなかつた理由は注を参照されたいが、この追悼文と著者略歴のなかに「exile」の一語が書かれているのがふと目に留まったことも大きかった。この語に孕まれているだろう、二人の政治的・知的経験の重みのようなものが、おのずと想起されたのである。以下に引用する一文を読んだとき、この「exile」には「亡命」がふさわしいと、わたしはそう考えたのである。

旧ユーゴスラビア崩壊後、ベオグラードでの政治活動を経てアメリカに移り住んだグルバッチは、自らの「友人であり、同志であり、師だった」グレーバーという人物を追悼するにあたり、その人生の転機を「academic exlie」だったと表現した。ニューヨークの直接行動グループ（Direct Action Network）やグローバル・ジャスティス運動に深く関わったためにイェール大学を解雇され、その後20を超すアメリカの大学職に応募しながらもただの一つの最終選考に残ることなく、それでも筆を折らずにイギリスの地で職を見つけ、『負債論』という人類学の古典を完成させた友人の人生を、グルバッチはそう言い表したのである。

そして、グレーバーもまた、かれらしいきわめてカジュアルな口調で自らの略歴を次のようにまとめている。このグレーバーの一文をもって解題の終わりとしていたい。

わたしはこれまで、なにがしかの社会運動に対して活動的に携わることをやめませんでした。フルタイムの仕事をこなしつつ、時間にゆるされるかぎり、亡命の暮らしを歩んできたのです。

I've continued to be actively engaged in social movements of one sort or another, insofar as I actually can, living in exile with a full-time job.

---

(9) Grubačić (2020) 'In loving memory of our friend, comrade, and mentor……David Graeber' から抜粋。

だれもが思ったことだとおもう。

わたしは、この人にもっとたくさんの時間があってほしかった。

【参考文献】

- Jacob Blumenfeld (ed), Vhiara Bottici (ed), and Simon Cristchley (ed) (2013) *The Anarchist Turn*. Pluto Press.
- ピエール・クラストル／渡辺公三訳（1989）『国家に抗する社会——政治人類学研究』（叢書 言語の政治），水声社
- ピエール・クラストル／酒井隆史訳・解題（2021）『国家をもたぬよう社会は努めてきた』洛北出版
- Graeber, D. (2001) *Toward An Anthropological Theory of Value: The False Coin of Our Own Dreams*. Basingstoke: Palgrave MacMillan.
- Graeber, D. (2007) 'There Never Was a West: Or, Democracy Emerges From the Spaces In Between', *Possibilities: Essays on Hierarchy, Rebellion, and Desire*. AK Press [片岡大右訳（2020）『民主主義の非西洋起源について——「あいだ」の空間の民主主義』以文社].
- デヴィッド・グレーバー著／高祖岩三郎訳（2009）『資本主義後の世界のために——新しいアナーキズムの視座』以文社
- Graeber, D. (2011) *Debt : The First 5,000 Years*. Melville House. Brooklyn, New York [酒井隆史監訳，高祖岩三郎・佐々木夏子訳（2016）『負債論——貨幣と暴力の五千年』以文社].
- Graeber, D. (2015) 'The Bully's Pulpit: On the elementary structure of domination', *The BAFFLER*, 2015, no.28 (<https://thebaffler.com/salvos/bullys-pulpit> [2021年10月31日12:30取得]).
- Graeber, D. (2015) *The Utopia of Rules : on Technology, Stupidity, and the Secret Joys of Bureaucracy*. Melville House. Brooklyn [酒井隆史訳『官僚制のユートピア——テクノロジー，構造的愚かさ，リベラリズムの鉄則』以文社，2017年].
- Graeber, D. (2018) *Bullshit Jobs: A Theory*. Simon & Schuster. New York [酒井隆史・芳賀達彦・森田和樹訳『ブルシット・ジョブ——クソどうでもいい仕事の理論』岩波書店，2020].
- Graeber, D., M.B. Kacem, and A. Turquier-Zauberman (2020) *Anarchy in a Manner of Speaking: Conversations With Mehdi Belhaj Kacem and Assia Turquier-zauberman*. Diaphanes.
- Grubačić, A. (2020) 'In loving memory of our friend, comrade, and mentor……David Graeber'. PM Press Blog (<https://blog.pmpress.org/2020/09/03/in-loving-memory-david-graeber/> [2021年10月31日12:00取得]).
- Grubačić, A. and D. O'Hearn (2016) *Living at the Edges of Capitalism: Studies in Exile and Mutual Aid*. Berkeley, CA: University of California Press.
- Lynd, S. and A. Grubačić (2008) *Wobblies and Zapatistas: Conversations on Anarchism, Marxism, and Radical History*, PM Press, Oakland.